

第50回 三重泌尿器科医会抄録

The 50 th Mie Urological Meeting, Abstracts

日 時：平成23年7月9日（土）

場 所：ホテルグリーンパーク津「伊勢の間」

1. 難治性 OAB 患者における pregabalin 投与の検討

三重大学医学部附属病院腎泌尿器外科
神田英輝

過活動膀胱の治療は抗コリン薬の投薬が第一選択であるが、十分な量の抗コリン薬によっても症状の改善が得られない症例や、副作用により薬剤の継続使用ができない症例も多い。今回、前立腺肥大症を伴う過活動膀胱で残尿が多く抗コリン剤服用困難であった82歳の症例で、腰痛に対して投薬されたプレガバリンにて症状改善を経験した。プレガバリンは末梢神経性疼痛に対して効果のある薬剤であり、抗コリン薬であるトルテロジンとプレガバリンの併用およびプレガバリン単独投与にて過活動膀胱症状の改善がプラセボより有意に得られたとの報告がある（Marencak J et. al. Neurouro Urodyn 2011）。難治性過活動膀胱患者においてプレガバリンの有効性と安全性を検討してゆきたい。

2. 腎盂尿管癌に対する体腔鏡下および開放性腎尿管全摘術の比較検討

山田赤十字病院
大西毅尚, 佐々木豪, 保科 彰

【目的】当院で施行した体腔鏡下および開放性腎尿管全摘術の安全性および制癌効果について検討を行った。

【方法】対象は2005年から2010年に、腎盂尿管癌と診断され、手術を受けた35例（体腔鏡下腎尿管全摘術16例、開放性腎尿管全摘術19例）。患者背景、手術結果（手術時間、出血量、合併症

など）および制癌効果（膀胱内再発、全生存率）について、両者の比較検討を行った。

【結果】患者背景、術後病理結果に差は認められなかった。体腔鏡下手術において、手術時間は有意に長く、出血量は有意に少なかった。術後の経口摂取、歩行開始時期、入院期間も体腔鏡下手術において有意に短かった。膀胱内再発率、全生存率は両群間で差はなかった。

【結論】体腔鏡下腎尿管全摘術の低侵襲性と安全性、および開放手術と同等な制癌効果が示された。

3. 外科的治療が施行された腎腫瘍における腫瘍径別良性腫瘍の発生頻度の検討

三重大学医学部附属病院腎泌尿器外科
曾我倫久人, 西川晃平, 山田泰司,
有馬公伸, 杉村芳樹

【緒言】今回当院における、腎腫瘍の腫瘍径別の良性腫瘍の発生頻度の調査を行った。

【対象、方法】

1991年1月から2011年3月に、腎細胞癌が疑われ、外科的治療として、腎全摘除術もしくは腎部分切除が施行された411腫瘍を対象とした。

【結果】腫瘍径別の良性腫瘍の発生頻度は、0-1 cm は42.8% (3/7), 1-2 cm は10.0% (3/30), 2-3 cm は4.7% (4/85) 3-4 cm は4.9% (3/61) 4-5 cm は4.1% (2/41), 5-6 cm は4.9% (2/41), 6-7 cm は0% (0/40), 7 cm は1.0% (1/98) であった。女性症例であること、腫瘍径が2 cm 未満であることが良性腫瘍である有意な予測因子であった。

【結語】

腫瘍径2 cm 未満の小径腫瘍、特に女性症例にお

いては良性腫瘍である可能性があるため、良性腫瘍での全摘除術を回避するためには腎部分切除を推進するとともに、手術前腎生検を検討する必要性が考えられた。

4. 三重大学における Brachytherapy の現状

三重大学医学部附属病院腎泌尿器外科
長谷川嘉弘, 曾我倫久人, 有馬公伸,
杉村芳樹
三重大学医学部附属病院放射線治療科
山下恭史, 伊井憲子, 竹田 寛
松阪中央総合病院放射線治療科
野本由人

三重大学において、2009 年 11 月より Low risk 前立腺癌に対して前立腺小線源密封療法を開始し、これまでに 8 症例に対して治療を行った。対象は Low risk 群が 7 例、Intermediate risk 群が 1 例であり、Intermediate risk 群に対しては外照射を併用した。リスク分類は D'amico の分類に従った。対象の平均年齢は 64.9 歳、平均 PSA 値は 5.81 ng/ml、平均前立腺重量は 28.2 g、cT1c が 7 例、cT2a が 1 例であった。Gleason score は 3+3 が 7 例、3+4 が 1 例であった。術後 1 年以上経過した症例は 4 例で、全例において PSA の上昇を認め、PSA bounce と考えられた。IPSS score においては、全例が術後 3 か月で増悪を示したが、その後改善に転じた。2 例で D 90 が 140 Gy を下回っていたが、患者の希望もあり経過観察をしている。合併症としては Grade 1 の直腸出血を 1 例に認めたのみであり、尿閉などは認められなかった。

5. 局所前立腺癌に対する総照射量 74 グレイの放射線治療の成績

愛知県がんセンター中央病院泌尿器科部
林 宣男, 小倉友二, 脇田利明

【目的】 局所前立腺癌に対する内分泌治療を併

用した総照射量 74 グレイの放射線治療の検討を行なった。

【方法】 2004 年 11 月から 2007 年 4 月まで、総照射量 74 グレイの放射線治療を施行した 70 例を対象とした。放射線治療は、三次元原体照射法で行なった。臨床病期は Stage B が 27 例、Stage C が 43 例であった。再発の定義は PSA Nadir 値から 2 ng/ml 上昇とした。

Neoadjuvant 療法は照射開始時まで、Adjuvant 療法は Stage B 症例で 1 年間、Stage C 症例で 2 年間継続した。

【成績】 1) 再発は 3 例にみられたが、癌死はなかった。2) 全体の 5 年非再発率は 94.5% で、Stage 別では Stage B が 95.2%、Stage C が 94.8% であった。3) 急性期有害事象は 1 例、晩期有害事象は 5 例認めた。

【結論】 総照射量 74 グレイの放射線治療は重篤な有害時事象も無く良好な治療成績を示した。